

興福寺旧境内の調査

— 第418次

1 はじめに

この調査は、奈良市中筋町内における団体事務所新築工事に伴う事前調査である。調査地は興福寺中金堂の北西約70m、平城京の呼称では左京三条六坊十五坪の中央北端にあたる。『興福寺流記』によれば、本調査区を含む興福寺寺地に面した三条六坊十三～十六坪の4町は、天平宝字年間に興福寺へ施入され、衆僧のための菜を植えた菓園・園地であったとされている。推定地内のこれまでの発掘調査では、中・近世の遺構・遺物が多数発見されているものの、古代の様相は明らかではない。

調査は、新築される建物の南北長にあわせて、東西幅6mの調査区を設けて実施し、調査面積121.2㎡、調査期間は2007年2月5日から3月12日までである。

2 調査

層序 調査地の層序は最上層に旧家の基礎および庭、井戸に関わる黒灰色砂質土層（約40cm）があり、その下には焼土・黄色粘土を含む暗灰色粘質土（約10～15cm）がひろがり、その下面で旧家以前の建物に伴う井戸、石列を検出した（B期）。その下は、暗茶灰色粘質土や焼土混黄灰色砂質土などの包含層（50～60cm）、白土混淡灰色砂質土で、中世末から近世の遺構は包含層下面で検出した（A期）。古代の遺構はそれらの下の白灰色粗砂、小礫混茶灰色砂およびその下層にあると推定される。

遺構 検出したB期の遺構には石組井戸SE9096、石列SX9121がある。調査区中央の井戸SE9096は一辺1.8mの隅丸方形掘形の中に、大型の石を積んで内法径1.0mの井筒を造る。深さ0.7m分までを確認した。今回取り壊した旧家以前の井戸で、埋土最上層の土師器小皿、陶磁器類、瓦片、井戸掘形出土の肥前陶磁染付片などから近世末に造られたことが知れる。

調査区北寄りを東西に横切る石列SX9121は0.2～0.5m大の割石を2列並べたもので、石列間に流水痕跡はなく茶褐色砂質土などの積み土が認められることから、石組溝ではなく基底幅約50cmの土堀の基礎とみられる。なお、石列と同じ面で浅い土坑を確認しているが、建物な



図171 第418次調査区位置図 1:5000

どは明らかでない。

A期には礎石建物SB9120・9140、石組南北溝SD9147、石組方形土坑SK9119・9135、素掘方形土坑SK9090、大土坑SK9109、木組SX9106、石組SX9105および多数の甕埋設土坑や小土坑がある。土坑を中心に重複関係から複数時期のものが重なっていると考えられるが、建物と並存する時期とそれらを壊した時期に分けられる程度で解明しきれていない。

礎石建物SB9120は調査区東南部の建物で、黄色砂質土上で礎石4個を確認した。4個の配列からは建物の全体像を把握するには至らないが、南北の礎石列の西2.1mを併走する南北石組溝SD9147は、北辺の東西石組SX9105とともに建物西辺と北辺の雨落溝にあたる。黄色砂質土はそれぞれの雨落溝まで及び、建物床面の整地土とみられることから、検出範囲は建物の西北部にあたり、南北礎石列北端の小礎石は縁東にあたるであろう。

石組南北溝SD9147は、幅約0.3m、深さ0.2mで調査区の中央を貫通する。上層は暗灰色粘土、下層は茶灰色砂で、両側石の内裾には板材があり、約30cm間隔に杭留めする。溝の東側には建物に関わる整地土が広がり、建物柱列との間に素掘方形土坑SK9090などの浅い土坑がある。溝の西側は暗灰色砂質土や小礫敷で、甕埋設土坑や方形石組土坑が掘られる。

建物SB9120の北雨落溝にあたる石組SX9105は、南北2列の側石と底石とからなり、底石は西方へ急傾斜で下降して木組SX9106へ至る。SX9106は南、西、東の3辺に薄い板材を小木杭で固定した南北1.2m、東西0.6mの浅い方形区画で、北辺は大土坑SK9109南縁に連なる。石組SX9105に集めた雨水などを受け、さらに大土坑に流入させる一連の水処理施設で、木組内部には植物が植えら



図172 調査区全景（北から）

れたものとみられる。

石組溝の西には、2個あるいは4個の常滑産大型甕を埋設した土坑や方形石組遺構SX9135が整然と並ぶ。

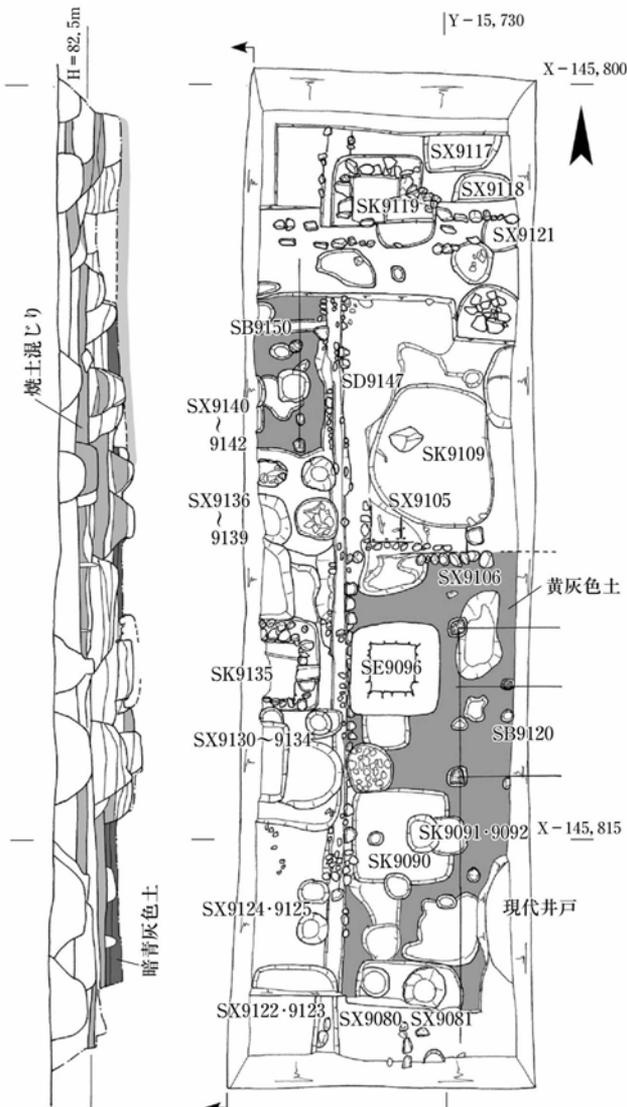


図173 第418次調査遺構平面図 1:150

表22 第418次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦	
型式	点数	型式	点数
巴(室町)	1	平安	1
巴(近世)	1	鎌倉	3
平安	2	室町	2
中世	1	中世	1
		近世	1
		型式不明	2
軒丸瓦計	5	軒平瓦計	10
丸瓦	平瓦	磚(レンガ含む)	凝灰岩
重量 32.88kg	91.53kg	4.08kg	0.04kg
点数 196	709	4	1

SX9135は内法1.2m、深さ0.3mで底石はない。側石上部をも覆うように土師器小皿、瓦質鉢などが投棄されている。なお、甕埋設土坑のうちSX9130~9134は埋土に焼土が混じる特徴があり、同様の埋土である礎石建物SB9140上のSX9141・9142・9145・9146とともに、より新しい時期の甕埋設土坑とみられる。

礎石建物SB9140は南北石組溝SD9147の西側の黄色砂質土の整地土上で2個の礎石を確認しただけで、規模・構造等は明らかでない。建物南の甕埋設土坑SX9136~9139の甕抜取穴が建物の整地土、石組溝を壊しており、土坑と建物と石組溝は一連の施設と考えられる。なお、SX9136・9137には漆膜が遺存し、遺構の性格を推測させる。

調査区南端の甕埋設土坑は掘形内に2基の甕SX9080・9081があり、東のSX9081の底が遺存して新しく見受けられる。掘形がSK9090と同規模で揃うことから建物SB9120と同時期とみられる。

調査区北には石組方形土坑SX9119と甕埋設土坑SX9117・9118がある。SX9119は一辺1.3m、深さ0.4m。石組溝東側石を壊して人頭大の石を2段に積み上げる。いずれもより新しい時期に属す。

遺物 土器は中近世の土師器、陶磁器を中心に整理箱54箱分がある。土師器は小皿・大皿が主体で灯明痕跡を持つものも目立ち、鏝甕が少量ある。土坑内の常滑産大甕には口縁形態に多様なものがあり、ほかに、瓦質の鉢や劃花文青磁碗などが少量ある。木製品には漆器碗2点、金属製品には鉄刀子1点、鉄釘、銅製品各2点、銅銭4点があり、瓦類は表示の通りである。

3 まとめ

調査の結果、古代の菓菌に関わる遺構は確認できなかったが、中世末(室町時代)~近世の建物2棟分と関連施設を検出した。建物は南北石組溝を雨落溝として共有し、石組、木組、大土坑からなる一連の水処理施設を備える。建物周辺には大型甕埋設土坑や方形石組を整然と配置し、甕内面に漆の残るものがあり「塗師屋」であった可能性がある。当該地周辺は中世以降、度重なる焼失を経ながらも居住空間として継続していた。(西口壽生)